

句集

墨
珠
沙
華

吉本昭子

句集・堅曼珠沙華

花鳥叢書第二十三集

発行 平成十一年二月吉日

編者 伊藤 柏 翠

作者 吉本 昭子
発行者

制作 文章工房すばる

奈良県北葛城郡上牧町片岡台 三一一八一五〇三

曼珠沙華

— 吉本昭子句集 —



作者近影 花鳥主宰・伊藤柏翠師と共に（大連・青島
クルーズにて）

序

吉本昭子さんは、昭和四十五年頃から五十四年迄平松措大師そだいのもとで俳句を學んでいた。平松措大師は、関西方面でホトトギス同人として立派な指導者で、その膝下からは数人の優れた作家が育ち、今も花鳥の有力作家となっている。其の一人が吉本昭子さんでもある。措大師の死後、翌、昭和五十五年より花鳥の投句が始まった。

措大と言う名前からして本訥な一人の男性と言ふ意味であつて、措大師はそうした好人物であつた様に思はれる。今回昭子さんの句集「曼珠沙華」が發刊されるに当り、そうした好作家の作風が昭子さん句のどこかに残っている様に思はれる。

今二百三十二句の「曼珠沙華」を選ぶに當り、すでに早世した措大師を遙かに偲ぶ思ひがする。その句はだいたい外連味けれんみが無く写生句であつて、ホトトギスの本流を行く感じが強い。

又昭和十八年四月十日に、家族揃って満蒙開拓団として渡満し、内地へ一人残った昭子さんと御両親は永久の別れとなった。今その作句を見るにいささかもその哀愁を覚え、昭子さんが人々に明るく又、熱心に句作に耽っている姿を見る事が出来る。それは、陰から昭子さんを支えている御主人龍太郎氏であって、幸せと言はねばならない。ここに御主人七十七才を祝ひ「曼珠沙華」の発刊をお祝ひする。

さて……まづ

北満へ墓参の誘ひ曼珠沙華

の句を句集の中に見る事が出来た。句集に「曼珠沙華」としたことも其の辺が察しられるところである。さて私が選をした昭和五十年以降の句の中に

夕霧の下りし離宮の花菖蒲

貴船なる川床も覆へる大夏本
川床の客迎ふ主の麻袴

によつて昭子さんが其の頃、京都によく遊ばれた事が察しられる。

まなかひの通路の島の暮れなずむ
日傘立て天安門に氷菓売る
ハルピンの濃き朝靄に燕とぶ
父と母眠れる土の青き踏む

の四句からはそれによつて昭子さんの生活が、その拳措きょそに移動のあつた事が察しられる。

同胞を埋めし大地のもの、芽よ

又

氷りたる江にソウルの灯がともる

はじめに書いた様に昭子さんの生活の大きな変化がこれらの句の中にもうかゞはれる。

春草や羊飼ひの名みなダビデ

羊飼ひの名がみなダビデ、と言う句があるがダビデと言う名を大きく堂々と詠うところにクリスチャンである昭子さんを想像する。此の事は共に大連へ行つた時、私の母の住んでゐた日本人の住居が其の後キリスト教会に變つていたので「古い牧師さんに逢つて聞いた方が良い」とすゝめたのも昭子さんである。私は明治末年の古いことゆえ、其のまゝに過してしまつたが、クリスチャンである昭子さんをその時しかと印象づけられたのであつた。

其の後の句作も日本全國に亘り

殉教の金き心白菊に

着ぶくれて只殉教の碑に黙す

の如く、正確に作り続け

御僧の作務衣のまゝで籬の客
指をもて描きし仏画のつゆけさよ

等の仏教的な作句も各所に散見出来る。

又情の籠もった句と言へば

寺 男 父 と す 僧 や 山 桜

の句が有りしみじみとさせられる。

不時着の自決の刀凄まじき
轟沈の血書身に入み黙祷す

の二句は我等の体験せし大戦の折の句であり身に入と思ひがする。

母の日や母想はざる日とてなく

此の句は昭子さんの過ぎて来た道を思へば、見過しに出来ない思いがする。

浅草が三社祭が好きな君

浅草生まれの私をすつきりと句に詠んだ昭子さんに大きな感謝を贈るものである。

今後、私の健在な限り又句の旅を共にしたいものと願って居る。

平成十年十一月吉日

大連の露の名千歳町なりし

柏翠

日本伝統俳句協会副会長
ホトトギス同人会長

伊藤 柏翠

【目次】

序

伊藤柏翠

初 桜

一三頁

青き踏む

二一頁

長 江

六一頁

あとがき

九九頁

略 歴

一〇一頁

(題簽 伊藤柏翠)

初

桜

(昭和四十五年—昭和五十四年)

一七句

コスモスにをりく冷えの二三日

校歌にも唱はれし坂初桜

日脚伸ぶ手押車の商ひに